

前夜の雨から一転、宇和海を望むミカン園地は陽光が差し汗ばむほど。大下夫婦と小松(右端)以外のアルバイト3人は、ユニホームの赤いヤッケを着て収穫作業に精を出す。2009年11月14日、八幡浜市真穴地区



# 太陽の下家族と働く

1面から続く

2009年11月13日夕方、八幡浜市真穴地区にカナルバイターの若者が続々と姿を現す。アジアの民俗衣装風の服をまとった女性、長髪にパーマをあて、おひげを蓄えたシゲエミュージシャン風の男性、と思えばトレーナーにジーンズ、スニーカーの二つの旅人。のどかな町のこの一角だけ、異国の港

町のように。  
この日、農家との対面式が開かれた。アルバイトは名前を呼ばれて立ち上がり、笑顔や緊張した表情で受け入れ農家においさづする。降りしきる雨の中、約1カ月余りを過ごす「家族」は同じ傘に人家に向かった。ミカン農家3代目の大下長久(67)、美智子63夫婦のもとにも4人がぞつた。

## 里帰り

大下家で働いた経験があり、先乗りして収穫を始めている小松(43)＝長野県、は神奈川県出身。大学卒業後、ヒリヤード場で働くなど夜中心の生活を続ける。おひげを蓄えたシゲエ(67)、美智子(63)夫婦のもとにも4人がぞつた。

の時「アドウ農園を開いた。得意客も増えてきたが、収穫が終われば手の空くこの時期は、毎年真穴を訪れる。「会いたい人がいてリラックスできる。里帰りみたいなもの」。日に焼けたまじましい笑顔は、かつておこられた農家そのものだ。真穴訪問3回目の清水西(32)＝神奈川県、も群馬や北海道、沖縄など全国を回る産地アルバイトとして働いてきた。「苗から作物を育て収穫することに喜びを感じる」と就農を志す。そして初めて八幡浜を訪れた近藤美奈子(25)＝静岡県、木村岳洋(29)＝愛知県。

「旅だけでなく、その土地で働き、住んでいる人と話すが楽しい」と屈託のない近藤は沖縄や九州などの島しよ部、長野などを回り、産地アルバイトや「シヤ」施設従業員として働く。木村は自動車会社工場派遣として働いた後、海外を転々とするうちに途上国開発に興味を持ち、日本の農業を体験しようと思いついた。

## お父ちゃん

「使った食器は自分で洗って。台所や風呂の場所、割り当てられた個室などを小松や清水が案内し、生活のルールを説明する。ささやかな歓迎会が始まり、普段夫婦2人の家はにぎやかになる。出身地の話や旅の思い出、新顔の2人も、Uモアだったり、時に説教も交する大下のとりとめない話にリラックスし、自然と「お父ちゃん」という言葉が口を滑る。大下は「この楽しさがあるからミカンを作っているようなもの」と相手を助す。「これまで受け入れたアルバイトは子ども

## ミカン山へ

翌日午前11時、夫婦とアルバイト4人はワゴン車で5分ほどの園地に向かった。肌寒い曇り空。普段は午前7時すぎの出勤だが、果実についた雨滴が落ちるのを待っていた。ミカンが鈴なりの段々畑で美智子が「果実を傷つけないように。色づき具合もよく見て」と摘み方を指南。はさみを手にもって木村を見て「あら、サウスポート(左利き)なのね」とカラカラ笑う。初心者2人は果実を一つずつひっくり返し葉をめくり、慎重に確認しながら作業。ほかの4人は3分ほど木の身軽に登り、手早く次々と摘み取る。キヤリアの音は歴然だ。屋敷、陽光が差し青空が広がった。眼下の宇和海は朝方の灰色から鮮やかなエメラルドブルーに。「すこい、きれいだな」と感嘆の声が上がった。午後4時すぎ、収穫は一区切

## 同じ釜の飯

11月21日。昼食後大下が「お父さんらは選果作業があるから後は頼む。けがには気を付けて」と園地を後にした。鳥のさえずりやラジオの音に、小気味よいはさみの音が重なる。初日はおぼつかなかった新人2人の手もリズム良く動く。ミカン摘みは、はた自には単調だが、近藤は「二つ三つの木や果実は違う。細いのに頑丈で登れる木があったり、逆に巨場になりそうな所に葉が生い茂っていて登りにくかったり」と解説する。

12月7日夜、大下家。選果から帰った大下と小松は遅い夕食。木村と近藤は居間のこたつでリラックスし、清水は自室で休んでいる。今季はミカンの色づきが早く、収穫も例年より進んでいる。アルバイトが去る時期も近づいてきた。朝方の冷え込みは厳しく、8枚重ね着していたらヤッケが破れた」と苦笑いする近藤は、次の行き先を決めようとして履歴書を作成中。木村が言った。「同じ仕事をしても同じ釜の飯を食べたく、家では読書したり、編み物したり、テレビを見たり好きなことをする。友だちじゃなく家族という感じがなあ」(森田康裕、植木孝博、二宮京太郎、高橋舞、文中・写真敬称略)